様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３０６５

研究課題名（和文）80年代日本文学における民俗学・神話学との関係性―雑誌「潭」を中心に―

研究課題名（英文）The Relationship between Folklore,Mythology and Japanese Modern Literature in the 1980s:A Study on Magazine"tan"

研究代表者
須賀　真以子（SUGA, Maiko）

日本大学・生物資源科学部・講師

研究者番号：００７６９９８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1980年代日本文学における民俗学・神話学との関係性について、文芸誌「潭」同人の作品を中心として解明するものである。成果として、同時代の文学において多くの重要な作品が掲載されていながら、今まで省みられることが少なかった「潭」という雑誌に焦点を当て、研究の土台を整えたことが挙げられる。また、同時期に刊行された知的総合誌「へるめす」との関わりを考察することで、当時の文化潮流の中で「純文学」の担い手と自認する作家たちが、どのように自らの立場を模索していったかを明らかにした。さらに、調査の過程で作家たちによる「連句」の存在をより深く探究すべきという今後の研究の構想を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文芸誌「潭」は古井由吉、中上健次といった小説家の他、評論家の粟津則雄、詩人の入沢康夫、渋沢孝輔という、80年代当時に積極的に作品を発表し、活躍していた同人によって刊行されていたが、従来、研究の現場では省みられることがなかった。本研究は、同誌「潭」の書誌調査、及び出版社への聞き取り調査を行うことで、今後の研究の俎上に載せた。また、「潭」掲載の作品の分析・考察を行いながら、同時代の学際的文化を担った雑誌「へるめす」との関係性を考察することで、当時の文化潮流に対する「純文学」からのアプローチや距離の取り方等を解明した。

研究成果の概要（英文）：This study elucidates the relationships between Japanese literature in the 1980s, and folklore and mythology, focusing on a literary magazine called “tan” (deep water) and its works of coterie. The foundation for studies has been established, with my research findings of a central focus on the literary magazine “tan.” Despite the abundance of valuable works published in that time period, this magazine “tan” was scarcely reflected. Furthermore, this study has examined the associations with a general cultural and scholarly magazine called “Herumesu” (Hermes), which was first published around the same time as “tan.” It has clarified the ways in which authors, recognizing themselves as bearers of “junbungaku” (literature as an art form,) explored within the cultural wave. Consequently, I have obtained a framework for further research, where the existence of “renku” (linked verse by authors) must be profoundly scrutinized in the research process.

研究分野：日本現代文学

キーワード：日本現代文学　潭　へるめす　1980年代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

80 年代という時代性を考慮した日本文学研究については、現在その進捗が著しい。「80 年代以降」という問題から文学シーンを問い直す柳瀬（2017）や、批評家の立場から批評を再検討する東（2017）、ジェンダーの視点からの倉田（2017）など、多くの成果が現れている。しかし、文学作品の多様化を反映し、個々の作家の作品については村上春樹（宇佐美（2008））など、一部の作家にのみ研究が集中しているのが現状である。現代詩においてはさらに成果は少なく、論者も同じ詩人としての立場からの発言が圧倒的に多いため、野村（2008）などの優れた論考もあるものの、「身内褒め」に終わっているものも少なからず見受けられる。

一方で、80 年代は「だんだん研究に民俗学的なものが入ってき」た時代であるとされる（牧野（2013））。「近代知」の限界に対して、文学では研究においても実作においても、民俗学的な成果や神話・古典文学にヒントを得たものが多く登場した。そのような流行については、近年、柳田國男や折口信夫の読み直しから、文学との関わりを検証する動きも活発化している（柄谷（2013）、松浦（2008）など）。個々の作品の影響関係から、時代への影響を問うものまで、研究の多様化が認められる。

このように、個人研究および時代・文化研究の両方の観点から研究が進む 80 年代日本文学ではあるが、1984 年～1987 年にかけて刊行された文芸誌「潭」については、管見の限り先行研究はなかった。「潭」は全 9 冊と刊行数は少ないが、同人である粟津則雄、渋沢孝輔、入沢康夫、中上健次、古井由吉はいずれも 80 年代を通して活躍してきた作家・詩人・評論家たちである。ただし中上を除いてはいずれも 1930 年代前後の生まれであることから、大衆消費社会に伴う新しい文学的流行にどう対処していくかという問題意識もあったものと思われた。

「現在、文学は感動と衝撃を与え得なくなったかのように見える（「潭」（1984））という、文学の現状についての危機意識から、「潭」には「文学の根幹を流れる詩性」（「潭」（1984））に視線をそそぐ作品が多く掲載された。「潭」同人について、古井由吉、中上健次については研究成果が継続的に蓄積されているが、現代詩は全体的に研究自体が乏しいため、『現代詩手帖』の特集号（2006 年 5 月号の渋沢特集、2016 年 4 月の粟津特集など）以外にめぼしい成果はない。しかし、「潭」というまとまりにおいて当時の文学状況を見つめ直すことは、80 年代の日本文学を追究する上で有効であると思われた。

以上のことから、1980 年代の日本文学を検証するためには、民俗学・神話学的成果と日本文学との双方向的な関係を追跡することが必要なのではないかと考えるに至った。とりわけ、実作の中にその表れを読みとることで、「文学」というジャンルについての問題意識をいかに乗り越えようとしたかを検証することができるのではないか。また調査対象として、当時から現在に至るまで活躍している同人も多い文芸誌「潭」を選定することはふさわしく、また同誌を研究の俎上に載せることもできると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、1980 年代日本文学における民俗学・神話学との関係性を、雑誌「潭」同人の作品を中心として解明することである。具体的な目的は以下の三点である。

（１）従来ほとんど研究がなされていない「潭」について、基礎的な資料調査を行い、研究の土台を整える。

（２）「潭」に載せられた文学作品が、80 年代の民俗学・神話学的成果とどのように交差するかを、外延および実作の両方から検討する。

（３）（１）、（２）を踏まえ、80 年代の文学における流れの中に「潭」を位置づけ、当時の文化潮流と文学との関わりとを考察し、今後の学際的な文化研究につなげる。

３．研究の方法

「２．研究の目的」に鑑み、本研究では以下の 4 つの課題を設け、書誌調査及び聞き取り調査と作品分析を中心に研究を行った。

（１）文芸誌「潭」の基礎調査

「潭」全 9 冊について、掲載作品・作家の目録を作成する。その上で、可能であれば存命の同人に「潭」創刊から廃刊までの経緯を聞き取り調査し、「潭」という文芸誌の特徴を明らかにする。

（２）80 年代の民俗学・神話学的成果の整理

「潭」及びその同人の発言や作品を手掛かりに、また文芸誌の書評欄を参照し、80 年代の民俗学・神話学的成果のうち、文学と立場が近いものを整理する。

（３）「潭」掲載作品の分析

「潭」に掲載された作品の分析を通して、（１）の特徴及び（２）との関連性を明らかにし、当時の文学的成果がどのように時代状況と相対していたかを考察する。

（４）80 年代文学の流れの中に、改めて「潭」を位置付ける
（１）～（３）の成果を踏まえ、80 年代の文学における流れの中にあって「潭」が何を目指したのかを考察する。その際、当時の文化潮流と文学との関わりという観点から再評価を行う。
研究遂行に当たって想定される問題として、調査対象の資料が少ないことが挙げられる。課題（１）において資料数が少なかった場合、或いは同人に調査を拒否された場合、学会参加の際に「潭」に関係する情報の提供者を募ることを予定した。また、課題（２）は反対に資料が膨大になってしまう恐れがあるため、「潭」同人と関わりのある文芸誌に限って調査を行うこととした。

４．研究成果

本研究の調査期間は当初 2 年間を予定していたが、2020 年度のコロナ禍により研究を大幅に制限されたため、2 回の期間延長を申し出た。そのため、実施期間は 4 年間となっている。しかし、延長を経てもなお、社会情勢のために一部の調査が限定的になってしまった点はある。以下、成果について報告するが、数字は「３．研究の方法」で設定した 4 つの課題を指す。
初年度は（１）（２）を中心に調査し、（３）の分析対象とする「潭」掲載作品の予備調査を行った。
研究対象である「潭」はまとまった研究の蓄積がないため、かなりの期間を（１）の調査に傾注した。また、「潭」の出版元に聞き取り調査を行い、創刊から廃刊までの経緯を調査した。（１）の成果として、「文芸誌「潭」解題と総目次」（「人間科学論集」）を発表した。
（１）の調査の過程で、「純文学」ジャンルの衰退についての危機意識の高まりが、（２）の民俗学・神話学への関心を高める一つの要因であったことを確信できた。
（２）の調査では、「潭」掲載作品や掲載広告を元に、注目すべき民俗学・神話学的成果をピックアップした。また、「潭」同人とのつながりから、作品に影響を与えたフランス現代思想などについても目配りが必要であることが明らかになったため、併せて資料調査を行った。
（３）については、（１）の総目次を作成する過程で分析対象を絞り込み、「潭」同人の古井由吉と、同じく同人の渋沢孝輔を中心に予備調査を行った。
以上の調査研究の意義として、80 年代文学における重要な作品が含まれながら今までほとんど顧みられなかった「潭」を研究の俎上に載せたことが挙げられる。また、「潭」経由で当時の民俗学・神話学的成果を収集・整理することを通じ、「民俗学ブーム」の背景を文学的な視点から考察対象とすることができた。
二年目は新型コロナウイルス感染症の影響で研究遂行に困難をきたした。とくに（２）は図書館の利用が制限され遂行が難しくなったことから、当年度は（３）を優先させた。
（３）について、「潭」同人の詩人、渋沢孝輔を対象に選び、詩集『緩慢な時』（1986）について、渋沢の 80 年代における詩作行為の試みを抽出した。結果、同詩集の仏教詩としての世界観の中に、本研究で着目する民俗学や神話学、哲学などの痕跡や世界観の共有が認められた。また、同詩集にしばしば挟まれる当時の世相への批判は、本格的な大衆社会の到来にあたり「潭」が抱いていた「文学」への危機意識とも通じるものがあると結論付けた。成果を研究会にて発表した。（「日本近現代文学・教育研究会」）
（２）について、制限付きではあるが資料収集を再開し、『書評年報』を用いて、1970 年から 1990 年まで、書評で多く取り上げられた民俗学・神話学および文化人類学に関連する書籍や著者を抽出した。前年度に行っていた「へるめす」などの雑誌の調査と合わせ、とくに取り上げられることが多い文化思想の発信者をある程度しぼり込めた。また、（２）（３）を遂行していく過程で、（４）について、文学の流れというよりも思想潮流との関係について、幾つか知見を得た。たとえば「日本人論」や「古代」の流行は、海外文学への眼差しや、海外文学からの学びとも関連性があるのではないかという知見を得た。
三年目は昨年度に引き続き、課題（２）80 年代の民俗学・神話学的成果の調査・整理と課題（３）「潭」掲載作品の分析とを行った。
具体的な成果として、昨年度研究会にて発表を行った渋沢孝輔の詩集『緩慢な時』について、調査・考察を続け、論文化した（「人間科学研究」第 19 巻）。調査としては、渋沢生前の蔵書が上田市立真田図書館に所蔵されていることから、同図書館への調査出張を行った。調査出張から得られた知見も参考にし、渋沢孝輔の詩における謡曲や俳諧を架橋した仏教的世界観表象が、80 年代当時の領域横断的な思想潮流の中での模索を体現していることを明らかにした。ただし、本調査は当初の予定では 8 月に調査を行うつもりであったが、感染症流行のため調査延期を余儀なくされ、2022 年 1 月まで延期せざるを得なかった。したがって、論文に十分に生かしきれなかった部分がある。それらの知見については、今後の研究に反映させる予定である。
最終年度にあたる令和 4 年度は、（２）（３）の課題について中心に調査を行い、（４）のまとめに至った。まず、本年度に至るまでの（２）の調査から、とりわけ「潭」と同時期に発刊された人文総合誌「へるめす」との思想的なつながりに着目し、その観点から改めて（３）「潭」掲載作品の特色を分析、（４）としての結論を研究ノートにまとめた（「人間科学研究」第 20 巻）。「へるめす」が提唱した「領域横断的な知」の志向を「潭」もまた共有しながら、一方で 80 年代に敢えて「純文学」の立場から雑誌を発刊していた「潭」独自の特色として、寄稿者の 1 人である安東次男の評釈の仕事をはじめとした、「連句」的な「座」の共有という意識があったのではないかという知見を得た。

さらに、「潭」掲載の天沢退二郎「三つの川」について、1980 年代詩における上述の知の志向が 1970 年代までとはどのように異なっているかという観点から考察を行い、学会発表を行った（「日本近現代文学・教育研究会」）。「潭」調査における成果を踏まえながら、1980 年代における文学磁場に個々の現代詩がどのように対処していったのかという観点について、発表を基に近日中に論文化する予定である。

以上の成果を通じて、今まで省みられることが少なかった「潭」という雑誌に焦点を当て、1980 年代の文学が当時の思想潮流と深く交差し、その中でどのように文学の立場を模索していったのかという点について知見を深め、文芸誌「潭」の独自性についてまとめることができた。

【参考文献】（※著者のあいうえお順）

東浩紀監修『現代日本の批評』（2017、講談社）／宇佐美毅編著『村上春樹と 1980 年代』（2008、おうふう）／柄谷行人『柳田国男論』（2013、インスクリプト）／倉田容子「男装少女のポリティクス」（西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える』2017、ひつじ書房）／津島佑子「アニ中上健次の夢」（『アニの夢、私のイノチ』1999、新潮社）／野村喜和夫『オルフェウス的主題』（2008、水声社）／松浦寿輝『折口信夫論』（2008、筑摩書房）／中上健次「物語の系譜」（『中上健次全集 15』1996、集英社）／牧野十寸穂「雑誌「國文学」と歩いてきた道」（「日本近代文学」88、2013）／柳瀬善治「八〇年代以降の現代文学と批評を巡る若干の諸問題について」（前掲『文学研究から現代日本の批評を考える』）／「現代詩手帖」59-4（2016）・49-5（2006）／「潭」1〜9（1984〜1987、思潮社）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 須賀真以子	４．巻 20
２．論文標題 一九八〇年代の「文学」をめぐる一状況―「潭」の言説磁場について―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 人間科学研究	６．最初と最後の頁 98-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 須賀真以子	４．巻 19
２．論文標題 渋沢孝輔『緩慢な時』にみる1980年代日本現代詩の試み	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人間科学研究	６．最初と最後の頁 86-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 須賀　真以子	４．巻 第146号
２．論文標題 文芸誌「潭」解題と総目次	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人文自然科学論集	６．最初と最後の頁 162-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 須賀　真以子
２．発表標題 一九八〇年代詩の方法をめぐって―天沢退二郎「三つの川」／『地獄にて』―
３．学会等名 日本近現代文学・教育研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 須賀　真以子
２．発表標題 渋沢孝輔の八十年代詩――『緩慢な時』を中心に――
３．学会等名 日本近現代文学・教育研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関